

『マカーマート』における医療のトポス —蘇生術、産婆術、預言者の医術—

岡 崎 桂 二

キーワード：マカーマート、イブン・ブトゥラーン、タヌーヒー、『医師たちの宴会』、
預言者の医術

第1章 初めに

これまでアラブ文学の実作、研究の両面において、詩に焦点が当てられ続けてきて、『千夜一夜物語』を除く散文に関する研究は低調であった。しかし、近年、散文研究、とりわけ「マカーマート」に関する研究、が活発になってきており、モンローを筆頭に、キリト、ハメーン・アッティラ、ザハリヤらによる諸種の専著が出るに及んで一層の活況を呈している。「マカーマート」研究の嚆矢は、マカーマ (maqāma、複数形、マカーマート) という語の意味内容とそのジャンルの成立事情の解明にあった。前者はリチャーズがほぼ納得がいく解答を出したが、後者はビーストン、マトックらの努力によりハマザーニーに先行する数々の作品が発掘されて、徐々に成立の経緯が明らかにされてはきているが、未だ決定的な解決には至っていない⁽¹⁾。そしてシュネリー以来、マカーマートはその流麗な文体が全てだとして、話の内容は等閑視されてきたが、近年ではそのストーリーを対象にした社会学的分析や、ナラトロジーの発展とともに「語り」の構造を問う斬新な研究が行われるようになってきた⁽²⁾。

本稿はこのようなマカーマート研究の進展を受けて、当該作品中の医療をテーマとするマカーマ (逸話) を、内容、形式、構造の各面から分析して特色を明らかにし、その結果を基に、ハマザーニー、ハリリー両作品の異同を明らかにしたい。筆者はすでにこの2作品の異同を明らかにしているが、今回、この医療のトポスを対象にすることで、先行論文とは異なる新たな結果が得られるか、あるいは先行論文の補強を行う事ができるかと期待している⁽³⁾。

ブレイやドールズが述べるように、医学の歴史は理論、実践双方に亘るその発展を示すのみならず、当該民族、集団の疾病に対する観念や行動を如実に表す。また、本稿が分析対象とする文学作品においては、症状、診断、治療行為の記述に止まらずに、広く一般大衆の現実生活が活写されている場合があり、民衆の病やその治療に関する考えや行動を読者に示す。総じて、医学史の研究は経済状況、社会構造、信仰生活等の多方面に亘ってその社会全体の理解に寄与するところ大であると見なされるであろう⁽⁴⁾。その意味において、ハマザーニー、ハリリーの『マカーマート』には、それぞれ蘇生術、産婆術をテーマとするマカーマがあり、また随所に、イスラーム圏で広汎に実行されていた「預言者の医術」と称される行為が記述されており、民間療法の実態と現実生活の一端を垣間見せてくれる。

本稿では『マカーマート』に先行するアダブ作品中で、この預言者の医術を含む「医療のト

「マカーマート」がどのように描かれているかを考察し、マカーマート・ジャンルの成立の一端をも明らかにしたい。

考察に当たっては、日本語への翻訳文献が乏しいアラブ古典作品の現状に鑑み、行文中に分析対象の作品をできるだけ日本語訳で示し、読者の理解を図る一助としたい。

第2章 タヌーヒー『窮地の後の救済』

アラブ・イスラーム社会においては、ジャーヒリーヤより伝わり、イスラーム勃興後、宗教的権威を付されてきた「預言者の医術」と、ヒポクラテス、ガレノス、を筆頭とするギリシア語よりの翻訳文献に基づく科学的治療の二つが、現在まで並行して実施されている。後者はアラビア医学やイスラーム医学の呼称を付けられているが、本稿ではより適応範囲が広いイスラーム医学を用いる⁽⁵⁾。イブン・スィナーの『医学典範』やラーズィーの『医学大全』を筆頭に、イスラーム医学における文献は多種多様に及び、その医療知識や治療技術は高度に発展し、中世キリスト教世界のそれらをはるかに凌駕していたことはよく知られている⁽⁶⁾。その一例としては、イブン・ムンキズが『回想録』で伝える、イスラーム軍と十字軍が対峙した時のエピソードが挙げられよう⁽⁷⁾。

他方、リサーラ（書簡、論文）や、アダブと総称される文学においても、病気や医療をテーマとする作品が書かれるようになる⁽⁸⁾。書記官僚（カーティブ）の職務上、あるいは教養上の必須知識の集成集、あるいは文人（アディーブ）、食客（ナディーム）が自己の知識と文章力を誇示した作品という性質を持つアダブ作品は、その百科全書的な網羅性と、イスナードを必須とするハディースにならう断片的な逸話性の二面を特徴とする⁽⁹⁾。これらの特徴を含み文体を彫琢したのが「マカーマート」であり、その頂点をなすハリリーの『マカーマート』はアラブ文学において規範とすべき作品とされ、影響は現代にまで及んでいる⁽¹⁰⁾。

ブワイフ朝下のイラク各地で法官（カーディー）を長く務めたタヌーヒー（940年～994年）は、在職中に経験した各種の事件を、『座談の糧 Nishwār al-Muhāḍara』と『窮地の後の救済 al-Faraj ba'da al-Shidda』という表題の大部の逸話集に纏め上げ、後者においては各話を類型別に配列することにより、全体の統一性を高める工夫がなされている。しかしながら、各エピソードの信憑性には多大の疑義が呈されていて、原話の加筆、修正、変形、等、フィクション化へ向けて、作為的な工作が施されていると主張する研究者もいる⁽¹¹⁾。しかし、ハディースにならう厳密なイスナードを付している点は、ジャーヒズの『吝嗇者たち』と軌を一にしており、アダブ作品の最大の特徴点を踏襲している⁽¹²⁾。

『窮地の後の救済』に収載されている逸話の中で、大病に罹り、死に瀕した人物が奇跡的に一命を取り留めるといふ事象ほど、標題のテーマに相応しいものは他にないであろう⁽¹³⁾。当該書の第10章は「病による苦痛を受けた後に、至高の神の思し召しにより健康回復した者の話」と題され、15話が収録されている⁽¹⁴⁾。それらのエピソード中、最も注目に値するのは、「アラブのガレノス」、あるいは「医学の長 imām fī al-ṭibb」と称されるラーズィー（865年～925年？932年？）と⁽¹⁵⁾、アッバース朝カリフ、ハールーン・アッラシードの侍医として著名なブフティーシューウの両名が取り扱われている点である⁽¹⁶⁾。

ラーズィーはライイとバグダードで病院（マーリスターン）の管理に当たるとともに、『医学大全』と称される大著をものしたことで知られている。『窮地の後の救済』中では、吐血し瀕死状態の若者に、「蛙の着物 *tuhlub*」と呼ばれる水草を処方して回復させた医師として紹介されている。さらに、病に悲観して自殺を思い至った若者が、たまたま枕元に置かれた肉料理（*maḍīra*）に蛇が入るのをみて、自害目的で毒が混入した料理を食したが、案に相違して奇跡的に回復した逸話にも登場する。この項では、ラーズィーは蛇の解毒作用を解説する医師の役割を果たしている⁽¹⁷⁾。

他方、ブフティーシューウはジュンディーシャープールを拠点に、やがてバグダードに出てカリフの侍医として活躍。その子孫も長く名医としての令名をはせた。『窮地の後の救済』では、全ての御典医が息を引き取ったものとして見放したカリフを、未だ生存の兆候ありとして、ただ一人主張した医師として描かれている。彼が吸瓢療法（*hijāma*）^{すいふくべ}を施すと、カリフは息を吹き返し、その謝礼として10万ディルハムを賜った逸話の主人公として登場する⁽¹⁸⁾。

この著名な両者の治療例を含めて、『窮地の後の救済』で紹介されている全事例は、原因不明の奇病を奇抜な処置を施すことで回復させ、その後、医師が自己の診断と処方を合理的に説明する、という体裁になっている。そこにジンや正体不明の悪霊が原因であるとする、迷信的で非科学的な態度は見られない。

しかし、ラーズィーのまとめた以下の症例集と比較するならば、『窮地の後の救済』所収の治療例はあくまで文学ジャンルに属するもので、採話者たるタヌーヒーの関心は病気そのものではなく患者を取り巻く人間に置かれていることが明らかになる⁽¹⁹⁾。ブラウンとマイヤーホーフがともに紹介する「症例集 *Kitāb al-Tajārib*」に基づいて、ラーズィーの診断の実際を見てみよう⁽²⁰⁾。

アブダッラー・ブヌ・サワーダはかねてより諸種の発熱（*ḥummayāt*）に襲われていた。発熱は6日おきに起こることもあれば、4日おき、あるいは3日おきに起き、時には発熱が何日も続くこともあった。発熱に先立ち軽度の悪寒（*nāfiq*）を覚え、さらに頻繁に尿意をもよおしていた。これらの症状から判断して、やがて患者は4日おきの発熱に移るか、あるいは腎臓に潰瘍（*khurāj*）があるかのどちらかだと診断した。しばらくすると尿に膿（*midda*）が混ざることになったところから、もはや発熱を繰り返すことはないかと患者に告げたが、実際にそのようになった。

最初に腎臓に潰瘍があると断定しなかったのは、患者はそれまでに3日熱あるいは他種の発熱に襲われていたことと、患者の罹っている多様な発熱は炎症（*iḥtirāqāt*）から発生しているもので、炎症部の拡大とともに4日おきの発熱に移行するのではないかと考えていたからである。また患者は立ち上がった時に腰部に錘をつけられたような鈍い重みを感じていると伝えなかったことも断定を避けた一因であり、私はこのことを患者に質すのを怠っていたのである。さらに、頻尿から見て、当然のことながら腎臓の潰瘍を強く疑うべきだったが、患者の父親もまた膀胱（*mathāna*）の虚弱を覚えて患者と同じ症状を呈していたこともまた知らなかったのである。この父親は発熱しない時から既に膀胱の異常を訴

えていたようだ。今後、生涯に亘ってこの症状を呈することがないことを望むが、全ては神の思し召し次第である。

患者が膿を排出後、利尿剤 (mā darr al-būl) を与え、尿中に膿を検出しなくなるまで飲ませた。その後、捺印粘土 (al-ṭīn al-makhtūm)、乳香 (al-kundur)、竜血 (damm al-akhawayn)、を処方したところ症状は消え、患者は急速に回復し、約二ヶ月で完治した⁽²¹⁾。

潰瘍は小さなものであったことは、患者が最初に腰部の重さを訴えなくなったことで分かった。だが、膿を排出した後で患者に腰部の痛みについて聞いてみると、以前からその症状を呈していた事が判明した。もし潰瘍が大きければ患者は自ら腰の痛みを告げていたことであろう。また、膿がすぐに排出されたこともまた患部が小さいことを示している。患者が膿の混ざった尿を出すようになってからでさえも、彼が掛かっていた医師たちのだけ一人として、私のような診断を下すことができていなかった。

ラーズイーが述べるように、悪寒とともに起こる不定期な発熱から、最初マラリアを疑ったが、尿中に膿を検出したことにより腎臓潰瘍と診断し、この適切で迅速な治療によって患者が平癒したことが理解されうる。記述は終始冷静な観察と推理を行う医師の姿を記している。医師は患部のみならず全身の症状を総合的に判断し、また家族の病歴も診断において考慮しなければならぬことを、この症例は示す⁽²²⁾。

このようにラーズイーの「症例集」はあくまでも医師の診断と治療の記録集であり、そこに医師あるいは患者の心理面、精神面に及ぶ記述はない。病気に苦しみ、死の恐怖に脅える姿は描かれていない。このような病気をめぐる人間ドラマはタヌーヒー作品を嚆矢とする。例えば、『窮地の後の救済』中には、「カーディー・アブー・フサイン・ブヌ・アビー・ウマルが尿分析医 (検尿家) ヤズィードの死を悼む」という標題のエピソードがある⁽²³⁾。

書記、アブー・アル＝ファドウル・ムハammad・ブヌ・アブドゥ・ラー・ブヌ・アル＝マルズバーニーはアブー・ジャアビーから聞いたこんな話をしてくれた。

ある日のこと、カーディーのアブー・アル＝フサイン・ブヌ・アビー・ウマルの所に行くと、大層な嘆きよう。そこで、「神よ、大法官様の気を沈めることなかれ。ところで、この落ち込みようはまたなぜでございます?」、と聞いてみた。

すると、「尿分析医 (mā'ī) のヤズィードが亡くなったのじゃ」、と答える。

「大法官さまの命よ末長く。一体、その検尿家のヤズィードとは、そも何者ですぞ? その者が亡くなったとて、このような大層なお嘆きとは?」と尋ねた。

「この痴れ者。そなたのような者にして、この台詞とは? ヤズィードはな、その技にかけては天下無双、一旦死すれば、あの技量に叶う者など一人としておらぬ。医術の長はその数多けれど、また、学問に秀でる者も数あれど、ヤズィードほどこの地において誇るべき者も他におらぬ。その腕にかけて古今無双の医者がみまかった後は、一体全体、どうなるのじゃ? これぞ今の世の衰退、国の滅亡の徴ではないのか?」、との嘆きよう⁽²⁴⁾。

そして、ヤズィードの持つその特段の能力を一々数え上げ、新奇な治療法のあれこれを

指折り数え、また、治療にてこずった難病の数々を思い出していた。やがて、「彼の数ある噂話の中にこんな話がある」と言って話し始めた。

しばらく前にな、当地のとある大人^{たいじん}が、娘が奇病に罹っていると打ち明けてくれた。娘は病のことを隠しており、父親も病に気がついていたが、しばらく内密にしておった。やがて事は生死に関わるくらいに進んだのじゃ。その病というのはな、実は娘の隠し所がひどく痛んで眠れもせず、もう昼夜を問わず泣き叫び、そのうちに患部から肉汁のような血が出るようになった。しかし、傷も腫れもなかったのじゃ。

父親は（このまま医者に見せなければ、死なせてしまうという）自分の責任を感じてヤズィードを呼びにやり、診察させたのじゃ。

ヤズィードは、「一言申し上げてもよろしいでしょうか」、と言って父親の同意を得てから、こう切り出した。「患部をこの目で見、手で実際に脈を取り、御息女に思いつく病因をばお尋ねするまでは、何の処方も下すことはできませんが」、と。

娘の状態は極度に悪く、もうほとんど瀕死の状態だったので、否も応もなく諾った。

医者は患部を触診し、痛みの位置を確認した後で、長々と娘に質問し、病気に無関係なことを次々に聞き出したので、跳びかかりたいほどの怒りを覚えた。しかし、医者の名声を思い出して何とか自分を抑えることができた。やがて、「ご息女の身を起こして下さい」、と命じたので、言う通りにした。

すると医者はぐいと手を陰部に差し入れたので、娘は大声を上げて叫ぶや、そのまま気を失った。ヤズィードが手を引き抜くと、糞虫（*khunfasā'*）より少しばかり小さい生き物を掴んでおり、それを投げ捨てた。

娘はすぐに座り直すや、「お父上、この者を下がらせてください。もう元気になりましたから」、と言った。

ヤズィードはその虫を掴むや、部屋から出て行き、私もその後を追った。

「一部始終をお話し下され」、と求めると、こう説明した。「私の処置はきっとあなた様のご不興を招いたことと存じますが、これも全て病因を突き止めるためでございました。娘御がある日お庭にお出になり、牛が引く水車小屋で座ったと言われた時に事情が飲み込めました。御息女が原因不明の痛みを訴えられたのは、その次の日のことでした。お嬢様の大事な所に牛に付くダニ（*qurād*）が入り込んだに違いないと判断しました。牛小屋にはダニがつきものです。一旦体の内部に侵入しますと、人体の血を吸い込み、その際痛みが生じます。血を吸い終わると痛みが和らぎ、今度はダニが嘔んでできた患部がはがれて出血し、体外に流れ出ます。これは手を入れて調べるしかない、と考えて実際に手を入れてみますと、予想通りダニにさわり、引き出したのでございます。ほれ、これがそのダニです。数日間にわたり、血を大量に吸ったために、すっかり見慣れたものとは形が変わっております」。

よく見るとたしかにダニであり、娘もすっかり回復した。

ピーストンが説くように、逸話の真実らしさは細部の信憑性にある。特に人名、地名、等の

固有名詞が具体的であれば、その話の信用度が増大する⁽²⁵⁾。本話においては語り手が実在の大法官であり、その職種からして虚偽の話を作り上げるとは考えられない。その人物が悲嘆の極にあるとする話の導入部は、その後の物語の展開に十分な信憑性を与え、読者の期待感を盛り上げさす。さらに、患者が庶民とは隔絶した深窓の令嬢であり、秘部に痛みを訴えている、という点も読者（男性）の興味を引くであろう。その読者の焦点は父親と医者二者に当てられる。人に言われぬ病に苦しむ娘を前に、苦悩する父親。自己の冷静な診断に自信を持ち、平然と処置を敢行する医者。この両者の心理的駆け引きは、現代にも通ずる普遍的なもので、この心理的サスペンスの盛り上げ方において、タヌーヒー作品は他のアダブ作品を凌駕する斬新さを有する⁽²⁶⁾。

このように、全体としてスリルに富み、劇的な構成をもった話であるが、タヌーヒーは物語の作者ではなく、あくまでも採話者としての立場に止まっている。それゆえ、タヌーヒーは厳密なイスナード記載、当人同士での会話体、というハディース形式に加えて、この逸話の終結部に、「法官、アブー・フサインは自著にこの話を載せていないことを、この本の著者（mu'allif）は述べておく。おそらく掲載するのが不必要と感じたからであろう」、とわざわざ記して、この話の信憑性を一層高める配慮を尽くしている。

「医療のトボス」をテーマとする話群から判断して、『窮地の後の救済』は、厳密なイスナードを付されたハディースと同種の逸話集と同時代人には評価されていた。ハリリー『マカーマート』序文が雄弁に語るように、12世紀においても、未だ自由に想像力を駆使した作品に対する忌避感が強かったのである⁽²⁷⁾。ハリリーに2世紀先行するタヌーヒーの時代においては、その忌避観は一層強固であったと想像される。このような文化的風土の中で、いかに劇的な物語展開を見せようと、形式、文体、双方から、『窮地の後の救済』は実際の事件の報告集と見なされていたのである。

しかしこのようなアラブ・イスラーム文化独特の風土の中から、大胆にも語り手を無名の人物に仮託し、フィクションであることを表明する作品が出現するようになった。その中で、医療と文学を接合した作品の一つに、イブン・プトゥラーン（1063年？没）の『医師たちの宴会 Da'wa al-aṭibbā'』がある。

第3章 イブン・プトゥラーン『医師たちの宴会』

イブン・プトゥラーンは、バスラ近郊の村で生まれ、幼少よりイブン・アッタイブらにつきイスラーム諸学とともに医学を修得し、やがて名医として名を馳せるようになる。その名声の一端はアレppoの文人騎士ムンキズの『回想録』収録のエピソードが物語っている⁽²⁸⁾。その後、イブン・プトゥラーンはファーティマ朝下のカイロに出るが、当地の医師団の長であるイブン・リドワーンと戦わした医学論争は名高い。しかし、論争には勝利しながらも、イブン・リドワーンの支配下にあったカイロの医師団からの排斥に会い、医者としての希望を絶たれてコンスタンチノーブルに赴く⁽²⁹⁾。その後アレppoの僧院でネストリウス派の僧として余生を送る。コンラッドはコンスタンチノーブルの僧院で隠棲中の1058年に『医師たちの宴会』が執筆されたと推測している⁽³⁰⁾。

『医師たちの宴会』は遍歴を繰り返し、論争を行った彼の自伝的作品と見なされており、若き医者を招待しながらも食事に手を出させない長老医は、論敵のイブン・リドワーンをパロディー化したものといえる⁽³¹⁾。イブン・ブトゥラーンは自作を『キャリアとディムナ』にならうリサーラ（書簡、論文）と称しているが、架空の人物を主人公にしているフィクション性と、韻文とサジュウ体散文の混交という文体、両面から判断して、ハマザーニーが創始したマカーマート・ジャンルに入る作品と見なしてよいであろうし、また後述するハマザーニー作品との興味深い共通点を有している⁽³²⁾。

『医師たちの宴会』は、ある医者と自称する若者がブワイフ朝下のマッヤーファーリキーンを訪れ、当地の医者長老と知り合いになり、自宅に招待されて宴席に列なり、そこで交わされる会話を骨子とする⁽³³⁾。冒頭部で長老の吝嗇ぶりが早くも仄めかされているが、目の前に並べられたご馳走の前に、老人は長口舌をふるい、腹を空かせた若者は一向に食事にありつけない。この両者の丁々発止のやりとりは、アダブ作品のトポスの一つである、トゥハイリー（寄宿者）と何とかしてその策を封じようとする吝嗇な主人のそれを髣髴させる⁽³⁴⁾。

若者の失敗は、会合当初、自分は食餌療養中で、おまけに食も細いと打ち明けたことにある。当主はその一言を金科玉条のようにして、食べ物に手を出させない。この状況設定はハマザーニーの第20話「マディーラのマカーマ」と酷似しているし、また、標題である天下のご馳走であるマディーラが食卓に並べられる点も同一である⁽³⁵⁾。ただし、言葉の洪水というプロットは同じであるが、前者においては当主の自慢は物自慢であるのに対し、イブン・ブトゥラーン作品においては、当然のことながら医学に関連する話題が中心という相違点がある。若者にご馳走を食べられまいとする下心を隠しながら、もっともらしい医学知識を披露する長老の博識と論述をモチーフにしている。

さらに老医師は弟子の、外科医 (jarrah)、眼科医 (kahhāl)、瀉血師 (faṣīd)、薬剤調合師 (ṣayādila) たちを呼び寄せて、宴席は一層にぎやかになる。弟子たちは若者に自己の専門分野に関する知識を問って偽医者の若者を窮地に陥れる。読者の興味はこの若者がいかなる機智を弄してこの危機を脱し、食にありつけるか、という一点に集中される。このサスペンスの盛り上げ方において、医療をテーマとする文学作品と探偵小説の共通性を指摘したブレイ説は、この作品においても適用可能である⁽³⁶⁾。

長老と若者は以下のように丁々発止と議論を続ける⁽³⁷⁾。

おもむろ
 徐に、長老は一房のキクジシャ (hindiba') を手に取って、「世にこれほど素晴らしい物も他にありませんぞ。何と言っても肝臓の病にはキクジシャが一番。腸の通りを良くし、大黃と混ぜてしばしば飲用もされとりますな。まあ、この青々とした幅広の葉をご覧なされ。瑞々しく爽やかな甘さを存分に味わってみて下され。強い酢と合わせて食べるともう絶品だ、と皆の噂。とくとごろうじろ。黄疸の治療にはこれ以上の良薬はござらぬ。ところが我が家の召使ときたらーああ、神よ、こ奴に手酷い罰をお与え下さいー最近よく間違いを犯し、今日もお客さまにはほんの少ししかお出ししておりません」と長口上。

そこで、思わずほんの少しばかり口に入れると、痛みが喉から頭の天辺まで広がり、鼻

血は出るは、涙も流れ出し、咳き込むは、2、3日、その痛みは消えなかった。

「気をつけて食べなされ」、と声をかけてくれたが、私がおも食べ物に関心を向けていると、「体のために、食事を控えるつもりだったのでは」、と聞いてきたので、「それはまたの日に」と言葉を返した。

すると、「最悪の罪は神のみ恵みを諦めてしまうこと、そして、最も手酷い過ちは直ぐに後悔しないこと。また病の中で最も性質の悪いのが食餌療法を先延ばしにすることですぞ」とお叱りの弁。……

「いや、食餌療法はどうも苦手でして」、と答えると、「たしかに食べ物を制限するのは辛いもの。だが、気が向かぬ事をするのが至高の行い。それ、ピタゴラスも言っているではないか。胃袋を制する者は全ての器官を正しく治める、とな。そなたも医学に身を捧げる一人であろう。これらが必要とは思われぬがな。自ら体に害のある食べ物を摂る医者ほどたちの悪い医者はいない。ちょうど悪に手を染める法学者同然の振る舞いじゃ。」……

こう言ってから、さらに、「まあ、お食べなさい。だが、わしの言ったことをよく実行してな。忠告を聞かば良いことが起こる。わしの戒めは昔の知恵と結びついているからな」、と告げた。

そこで、料理に手を伸ばすと、その手をつかんで、「まあ、食べる前に、そなたの病に効き、健康を取り戻す策を耳に入れてあげよう」、と宣う。

長老はこう述べた。「まあ、まあ、落ち着きなされ。滋養が体に回るように、そなたの学識を知恵の中に加えたら、きっと神は病を治して下さるであろう。悪い食べ物は身を滅ぼし、心身の活力と靈魂を最低のところまで低下させる。学問上の真理は靈魂を清浄にし、身体を至高の点まで上昇させる。つまり、靈魂の定位する所であり、また力がこもり、栄光の光が留まる所にな。賢人曰く、人はパンのみにて生きるにあらず、福音にて生きるとな。ソクラテスも、食欲にかまけて食べ過ぎてはならぬ、と言っておるではないか。また、プラトンも、人は生きるために食べるのであって、食べるために生きるのではないとな。急いで食べることなかれ。ゆっくり、ゆっくりとな。鋏を入れる前に千回も試す熟練の裁縫師のように時間をかけなされ。急いては事をし損じる。こんな諺をご存知かな。辛抱強く進めば目標を遂げ、急ぐと思わず落とし穴にはまる、という」。

「いや、いや、尻込みして大事を取り逃がすことの多さよ。急な時ほど知恵も浮かぶ、とも申しますが」、と若者は反論した。

すると長老は、「どうしてもというのなら、ほんの一口にし、よく前歯で噛み砕き、臼歯で磨り潰し、舌でこね回し、水分は飲み込んで、残った物を再び奥歯で噛み砕き、そこに野菜を加える。だが、香味料は無用のこと。心に願いごとが有る時、靈魂は目を覚ます。願いごとが少なければ心も満たされる、と詠われておる。肉は避けなされ。胃袋を生き物の墓場にするなかれ、とソクラテスも申しておる。またガレノスも注意しておるではないか。最大の愚か者とは、見つけ次第、委細かまわずに口に入れ、胆汁質の物と酸っぱい物を一度に食べ、粘液質の食べ物と塩っ辛い物を食べ合わせ、黒胆汁質の物と脂肪たっぷりのスープを同時に食べる者のことじゃ、とな。よくお聞きなされよ。胆汁は子供と同じで、果物

に喜び、忠告を嫌がるものだ。黒胆汁はな、女子供に鼻綱を牽かれた雄牛同様、一旦怒り出せば、もう手の施しようがない。そして粘液は獅子と同じく、たとえ死んでも奴隷を操るように悪さを仕掛ける」、と長台詞。

なおも言葉をついで、こう言った。「友人と仲良くやって行くように、血液を清浄に保つことですぞ。胆汁質の食べ物は上司に仕えるごとく丁重に扱い、黒胆汁は敵と接するごとく戦いを挑みなされ。くれぐれもいろいろな物を一度に食べてはならぬ。食べ物の種類が多いと胃に負担がかかって消化が遅れ、折角の食べ物を活力に変えることができなくなる。また歯が咀嚼できる範囲で食べなされ。でないと胃でうまくこなれませんから。腸にスムーズに届くように、食べ物、飲み物、空気を3分の1づつ摂りなされ。便所に通うことを考えて食事の量を少なめに。……飲食の量を減らせば減らすほど病気に罹りにくいのは世の習い」。

老人はご馳走から私の気を逸らそうと、この種の格言、名言を話し続けた。長々と話を続け、何時果てるともなく戯言を吐くので、とうとう私も反論するのを止め、ご馳走に目をやり、酢と野菜をじっと見ていたが、老人は調味料を付け足すでもなく、一口どうぞとも言わなかった。その様子を見て、すっかり満腹したものと思ひ込み、召使に向かって、「この皿を下げて、焙り肉をお出ししろ」と命じた⁽³⁸⁾。

その後、長老は弟子を呼び集め、一同は酒を飲み始めて宴席は一層賑わう。しかし、若者は一人飲食にありつけず、フラストレーションは高まる一方である。終結部で、話し疲れ、飲み飽きた長老が寝込んだすきに、若者は召使とともにご馳走を平らげてしまう。目を覚まして、事の次第を覚った長老は怒りにかられて若者を追い出す。翌日、たまたま長老宅を通りかかった若者を見つけるや、医師は邸内の全ての門を閉ざし、窓を閉めることを命ずる。そのリアルな描写を通して、作者は体面のみを重んじ、その実、狭量な偽善者の姿を読者に伝える。

『医師たちの宴会』は形式において、ハリリーが確立したマカーマート・ジャンルの作品とは齟齬をきたしているが、アラブ世界において忌避されてきたフィクションという面で、このジャンルに属すものと考えられている。マカーマート作品は、架空の主人公が各地を放浪して悪事を働き、その犯行を語り手が記録し、人々に話すという形式を骨子とする。それに対して『医師たちの宴会』は舞台が1箇所固定されていることと、語り手と主人公が同一人物という2点で大きな違いがある⁽³⁹⁾。

しかし、主人公が学識に基づいて雄弁を発揮するという基本的な特徴は共通であり、文体的にも、韻文と散文の混交、サジュウ体の頻繁な使用、が見られ、マカーマートに通底する特徴を備えている。ともあれ内容的には、『医師たちの宴会』は、トゥハイリーが行う医学論争、というただ一つのテーマでストーリーを展開させており、短いエピソード集しか存在しなかった時期の作品としては異彩を放っている。そして、ハマザーニーとイブン・ブトゥラーンの両作品は、多くの共通点を有しながらも、相互に影響し合うことなく成立したと考えられている。この点において、ある画期をなす文学作品の出現は、決して一人の天才がもたらすものではなく、時代の潮流、文学的環境が自ずと生み出すものだ、という最新の文学理論の教えるところ

と軌を一にしている⁽⁴⁰⁾。

第4章 ハマザーニー「モースルのマカーマ」

ハマザーニー（969年～1008年）の『マカーマート』中には、病院や床屋を舞台にしたマカーマ（逸話）があり、また、解毒剤という言葉も使われている⁽⁴¹⁾。しかし、直接医療行為を行うエピソードは第21話「モースルのマカーマ」である。冒頭で、語り手のイーサーと主人公、イスカンダリーは、帰郷の途中で盗賊に襲われ、身包みをはがれたことが明らかにされる。二人はモースル近郊の小村にたどり着き、イーサーが、「さていかなる策を弄しようか」と相棒に尋ねると、イスカンダリーは、「アッラーの思召し次第」と答え、ある家の中に入っていった⁽⁴²⁾。その家の主人は丁度息を引き取り、泣き女たち（nawāḍib）もすでに集って来ていた。その様子をこう記している。

家は人で溢れかえり、男どもは悲しみにうち沈み、恐怖のあまり衣服を引き裂き、女連中は髪を振り乱し、胸を叩き、首飾りを引きちぎり、顔をびしゃびしゃと叩いておった。

イスカンダリーは、「この黒い集団のなかには（利益をもたらす）椰子があり、この群には（獲物となる）子羊がきつというよ」と言いつつ、中に入っていった。見ると死人はすぐに運び出せるようにと、顎のところにしっかりと布で縛ってあった。湯灌用に湯が沸かされ、いつでも運び出せるようにと棺も準備され、死装束も縫いあがり、墓もすでに掘られていた。

イスラームでは、死後一昼夜以内の埋葬を規定している⁽⁴³⁾。このような一刻をも争う緊迫感に溢れた舞台設定を行った作者の、その最大の腕の見せ所は、イスカンダリーがどのような策を弄して村人たちを籠絡させるかにある。イスカンダリー、イーサー両名は追いはぎに会い、身包みはがれた状態で村にたどり着いている。この点で、治療を施すのが一流の医者や本職の医者である『窮地の後の救済』との最大の相違点である。『窮地の後の救済』中の医者は一見奇矯な処置を行うが、そこには冷静な診断と合理的な説明がつけられていた。『マカーマート』の偽医者、俄か医師は、そのような権威と資格から最も遠い状態にある。

イスカンダリーは落ち着き払ってまず喉を触診し、次いで脈を取り、やおら、「この者は未だ生きておる。ただ気を失って、意識がないだけだ」と村人に告げる。その理由を問われると、「人は死ねばその腸は冷たくなるが、今この者に触れてみると、生きていることが分かったのじゃ」と説明する⁽⁴⁴⁾。

この短い記述には、作者の医学的知識に基づく周到なプロットが張り巡らされている。まず冒頭で、当該の人物は死んだばかりであると明かされており、死後しばらくの間、腸内温度はある程度保たれているという科学的知識を援用している⁽⁴⁵⁾。さらにイスカンダリーは、この人物は失神しているだけなので、その意識を回復させることは可能だ、と述べているだけで、死者を生き返らせるとは一言も言っていない。死者を蘇生させることの不可能性に照らしてみると、失神した者の意識を回復させる可能性は相当高いと一般的には思われるであろう。この

ようにして、イスカンダリー、否、作者は、医学的知識と人間心理を利用して巧みな導入を図る。

村人は次々に男の尻に手を差し込み、イスカンダリーの言の正しさを身をもって確かめる。この遺体冒涇とも言うべき行為に続いて、イスカンダリーはなおも医者として施すべき処置に取り掛かる。まず立ち上がって死者の衣服を剥ぎ取り、新たにターバンを巻きつけ、護符を懸け、さらにオリーブ油を口に含ませる⁽⁴⁶⁾。この手際良い行為を見て村人は完全に彼を信じ込み、全村挙って感謝の贈り物を捧げる。しかし2日経過しても、当然のことながら蘇生させることができず、偽医者と語り手とは村人からの打撃を受け、ほうほうの態で脱出し、隣村にたどり着く。

直前の失敗にも懲りずに、この地においてもイスカンダリーは言葉巧みに住民を操り、純朴な村民を愚弄する。折しも人々は河の氾濫に怯えている最中であり、この機を捉えてイスカンダリーは、黄色の牛と乙女を捧げ、指示通りの祈りをするると洪水の危害を防いでやると持ちかけた⁽⁴⁷⁾。前回の失敗に比して、この村では彼の策略は見事に成功し、村人を跪拝させる間に、犠牲牛を屠り、乙女を陵辱して去って行く。

このように、通常一つのエピソードを軸にストーリーが組み立てられている『マカーマート』にあつて、当該マカーマでは、同一のテーマの2話が表裏一体となつて展開される異質の構造をなしており、そこに作者の創作意図が感じ取られる。

前後半に通底するテーマは、「蘇生」を核として、純朴な村民が哀れにも愚弄される姿を描出することである。蘇生のテーマは前半部では明示的であり、後半部では犠牲獣としての「黄色の牛」という表現で表されている。『コーラン』第2章「雌牛の章」は『旧約聖書』と共通するモーセを主題とする内容であり、人々が迷信にかられて捧げる「黄色の牛」の表現は、モーセが行うユダヤ人の蘇生、救済と関連づけて用いられている。この観点から見れば、「モースルのマカーマ」は、ヘブライ、ギリシア、ラテン、等の地中海文化に共通した「蘇生術」という文学的トポスの一環と見なせうる⁽⁴⁸⁾。

この「蘇生術」というトポスを援用して作者、ハマザーニーは、軽々しく人を信じ、他人の言葉に惑わされる人々の愚かしさを冷酷に描き出す。この「マカーマ」は『マカーマート』全編に底流する作者の世界観、人生観が集約されたものと言えよう。終結部において、イスカンダリーはこんな捨て台詞を吐く⁽⁴⁹⁾。

アッラーよ、われを遠ざけることなかれ
いづくにありや、わがともがらは
世のものどもの愚かさよ
わが謀に易々とかかれば
われはまた、思いの限り手にいれし
詐欺と偽り重ねつつ

前編において、村人はイスカンダリーに言われるままに死体の尻に指を差し入れ、その指示通りに死体を逆さまにし、持ち上げては床に投げ出す遺体損壊罪に相当する行為に及ぶ。後半

部では、見知らぬ一行に大事な牛を屠り、娘を陵辱される。おまけにイスカンダリーの命じるままにいつまでも跪排を続け、その間に悪漢どもは逃亡を図る。この村人たちの姿こそ当代を象徴するものだ、というハマザーニーの主張が伝わってくる。住民の軽挙妄動の様は前半部で用いられている「護符 tamīma」と後半の「黄色い牛 baqara ṣafra'」の2語が象徴している。ともに迷信に駆られた行動を示す。

このように「モースルのマカーマ」は蘇生術をテーマとしながらも、『マカーマート』全体に通ずる作者の世界観、人間観を凝縮したマカーマであると結論付けられるであろう。

第5章 ハリーリー「オマーンのマカーマ」

アラブ文学においてマカーマートという新しいジャンルを大成させ、定着させたハリーリー(1054年～1122年)は、ハマザーニーの『マカーマート』を踏襲しながらも多くの面で新機軸を打ち出している⁽⁵⁰⁾。最も顕著な相違点は、語り手、ハーリスと、主人公、アブー・ザイドの役割を固定化したことと、アブー・ザイドを万学の雄とし、アディーブとしての理想像に仕立てあげた点にある。既に見たように、ハマザーニー作品においては、イスカンダリーは舌先三寸の詐欺行為を働く悪漢として描かれていたが、ハリーリー作品では、アダブを身に付けた「完全人間」として読者の前に姿を現す⁽⁵¹⁾。彼は文学は文学、言語学からイスラーム法(相続と奴隷買い)に及ぶまで、森羅万象を熟知している⁽⁵²⁾。その知識は医学にまで及び、第39話「オマーンのマカーマ」では産科の心得を発揮する⁽⁵³⁾。

また第47話「ハジュルのマカーマ」は吸瓢(hajama, ḥajm)でストーリーが展開するという点で、ハマザーニーの第33話「フルワーンのマカーマ」と軌を一にしている。さらに終結部でイスカンダリーに言及しており、作者、ハリーリーが先行作品を意識していたことをうかがわせる⁽⁵⁴⁾。しかし、ハリーリーはテーマやプロットにおいて多大の変更を行っている。吸瓢療法を受ける息子を登場させ、親子共犯で、ともども自己の窮状を見物客に訴えかけて同情を引き、金銭を巻き上げると言うプロットが主であり、治療の様子は描かれていない。それゆえ、本稿ではアブー・ザイドが産婆役を演じる「オマーンのマカーマ」を分析の対象とする。

偶然のことながら、このマカーマはハマザーニーの「モースルのマカーマ」と同様に、護符を仲立ちとする前後半の2つのエピソードから成り立っている。この形式は全く偶然の符合であるかもしれないが、先行者を十分に意識していたハリーリーが、その先行作品に倣った可能性は多いにある⁽⁵⁵⁾。その一例として、ハマザーニー作品においてモーセと黄金色の子牛に言及されていたのに対して、ハリーリーはノアの洪水の話題を持ち出し、両者ともに『コーラン』や『旧約聖書』に関わる学識を披露している。まさに、「どこにおいても、その場所にふさわしき言葉あり」という俚諺を証明している⁽⁵⁶⁾。

話は語り手、ハーリスが海を横断するために乗船しようとした時、ある老人が航海の安全を保証すると称する護符(‘udha)を売りつけている場面で始まる。ハーリスは他の乗船客ともども、男の弁舌に感心しつつ護符を購入するが、やがてその老人がアブー・ザイドであることを知り、同船を喜ぶ。しかし一行は嵐に遭遇し、護符の効果が発揮されたのか、海の藻屑となって消え果てることなく、両名はとある島に打ち上げられる。ところが、その島の住民は皆悲し

みに打ちひしがれており、訳を聞くと、島の領主の妃が産褥にあるが、難産に苦しんでいるとのこと。それゆえ、長らく世継に恵まれなかった領主を筆頭に、島の住民はそろって心配の極にあった。その弁を聞くなりアブー・ザイドは、自分は安産の護符を所持しているので、すぐに領主の館に連れて行けと談じた。城に着くと、城主は、「そなたの言が真実で、その予言が外れることがなければ、望みとおりの褒美を取らす」と告げた。それを受けてアブー・ザイドは、一同を立ち去らせた後に、葦筆にたっぷりとサフランを染み込ませて海胞石 (zabad bahri) にこう書き付けた⁽⁵⁷⁾。

腹の中の赤児 (janīn) よ、忠告者の言によく従え
 ^け実^けに人の言葉に耳傾けることこそ信仰への第一歩
そなたは汚らわしい罪をば免れて
 腹の中でぬくぬくと安住す
そこには偽善の友もなく
 敵意に満ちる人もなし
だが一度日の目を拝むれば
 世は悪の尽きることなし
さめざめと泣くもむべなるかな
.....
わが命にかけて忠告いたす
 真率なる忠告、入れられぬこと多けれど⁽⁵⁸⁾

こうして書き上げたものを絹で包み、密かに妃に身に付けさせた。すると、護符の靈験あらたかに、妃は無事に男児を生み落とし、アブー・ザイドは多額の報奨に与る。

アブー・ザイドの行為は「預言者の医術」と総称される民間療法に属するもので、ギリシア医学を継承、発展させた科学的治療と対をなして、広くイスラーム世界で実行されてきた。その療法は多岐にわたるが、「神が下された病いに、癒しなきもの無し」との信念の元に行われ、医療と信仰が表裏一体となっているところに特徴がある⁽⁵⁹⁾。この点で、4体液のバランスの乱れが病因となり、その不均衡を正常に戻すことを治療目的とする、イブン・シーナーやラーズイーらの見解と根本的な相違を来たしていた⁽⁶⁰⁾。

「預言者の医術」の根本は神への全幅の信頼 (tawakkul) にあったので、祈願、コーラン読誦、コーランの章句を書付けた護符の着用、蜂蜜等の自然食品摂取、等を基本としていた。流産予防には『コーラン』35章41節の「神は天と地を墜落からお守りくださっている」を、そして鼻血防止には11章44節「大地よ、水を飲み込め、大空よ、雨を止めよ」がそれぞれ唱えられていた。また民間療法として、諸種の魔除けも行われていた。アブー・ザイドは領主に海胞石を所望したが、これを妊婦に懸けさせると、分娩がスムーズに行われる効能があると信じられていたのは、その一例である⁽⁶¹⁾。

同じように医療とテーマとするマカーマであるにもかかわらず、ハマザーニーとハリリー

の両作品には顕著な相違が見られる。まず主人公の行う犯行は前者においては死者の蘇生という明らかに不可能なことに挑み、失敗に終わっているのに対して、後者では状況に応じて即座に安産祈願の詩を詠み上げるといふ、アディーブに相応しい行動を取っている。ゆえにアブー・ザイドが得た報酬は犯罪による不当利益ではなく、アダブ（学識）披露に対する当然の報酬である。

また、被害者像も異なっている。ハマザーニー作品では純朴で、かつ軽薄な庶民が被害にあっていたが、ハリリー作品では島の支配者であった。

このような差異の意味するところを、本稿のまとめとして以下に考察する。

第6章 比較考量

タヌーヒーからハリリーに及ぶ医療をテーマとする文学作品を分析してみると、改めてアラブ文学の変遷、変容のさまが浮かび上がってきた。ラーズィーの「症例集」の冷静で客観的な記述とは異なって、タヌーヒー作品では、読者の興味を引こうとする意図を明らかにしている。しかしその語りの形式は、イスナードを付したハディースに倣うものであり、細部に至るまで真実性に固守している。このような、あくまでも実話であることを明示するタヌーヒー作品から、フィクションであることを明確にし、社会批判をこめ、文体を彫琢したイブン・ブトゥラーン作品へと変化をみせた。さらにハマザーニーはイブン・ブトゥラーン作品と内容、文体面で共通点を有しながらも、新たに、各地を放浪するアディーブを主人公にし、一貫したストーリーを展開させる新機軸を凝らした。またハリリーは文章を一層彫琢し、行文中の詩の量を倍加させたことと相俟って文章の流麗さに磨きをかけた。そして主人公を万学の雄に仕立て上げ、「オマーンのマカーマ」でも、安産用の祈祷文をたちどころに書き上げ、護符に拵え挙げる離れ業を演じさせている。

このように、タヌーヒーからハリリーへと至るうちに、フィクション化、文体、の両面において様々な変容を来たしながらも、この「医療のトボス」研究が明らかにしたように、これらタヌーヒー、イブン・ブトゥラーン、ハマザーニーの3者はマディーラのモチーフを用いるという共通性を有していた。この事実を通して、「医術」という互いに通底するテーマを用い、さらにその中に共通のトボスを嵌め込まれていることが明らかになった。背景となる時代、地域を異にしながらも、アラブ・イスラーム世界に、一貫して似通った作品を生み出す時代環境、文化的風土があったことが知られよう。

さらに、ハマザーニーとハリリーによる「医術のマカーマ」を分析し、その比較を行ってみると、両者の『マカーマート』全体に通じる相違が、当該マカーマにおいても現れていることが分かる。

最も顕著な違いは主人公像である。ハマザーニー作品では、機智を働かしながらも、その犯行は食い逃げ同然のしみったれたものである。他方、ハリリー作品の主人公は、流麗な詩をものにする事で目的とする金品を巻き上げている。この行為は犯罪ではなく、アダブ（学識）を披露したことに対する当然の褒賞である。アブー・ザイドは万学を修得した完全人間、アディーブの理想像として描かれている。

ひるがえって、イスカンダリーは随所でアディーブの片鱗を見せはするが、その本質はトゥハイリー（寄宿者）と大差ないことを露呈しており、本マカーマでの如く、その行為はしばしば失敗に及び、手酷い罰を受ける。この主人公像の相違は両者の『マカーマート』全体に通底するものである。

二つの『マカーマート』における相違は、語り手の描き方においても現れている。ハマザーニー作品の語り手たるイーサーは、単にイスカンダリーの犯行の目撃者、その語り手の役割に止まらずに、時には単独で犯行に及び、またある時はイスカンダリーの悪事に加担する共犯者の役割を果たしている。当該マカーマ冒頭の、「いかなる策 (hīla) を弄そうか」の台詞が彼の共犯者としての意図を示している。いわば、イーサーはイスカンダリー同様、身に付けたアダブを悪用する偽アディーブなのだ。

これに反して、ハリリー作品の語り手たるハリスは、全50話を通して、時にアブー・ザイドの犯行の被害者になることはあっても、自ら犯行に参加することなく、終始語り手の役割に徹している。

両『マカーマート』に見られる相違は、被害者像においても指摘できる。この「モースルのマカーマ」においては、語りの焦点は無知な村人の姿に当てられていた。イスカンダリーの舌先三寸の言葉に踊らされてグロテスクな死体損壊を行い、娘を陵辱される。その被害者の執拗な描写に、『旧約聖書』や『コーラン』で描かれている黄色の牛を信仰するユダヤ人同様の、無知蒙昧な人々への揶揄、嫌悪が現れている。

他方、ハリリーの「オマーンのマカーマ」の被害者は他のマカーマと同じく支配者階級である領主であった。彼の『マカーマート』の被害者は、カーディーや領主等の社会の上流階級、支配層に属する人物が多い。一見、アダブ（礼儀、学識）を備えていると思われる人物がアブー・ザイドの雄弁によって籠絡される。この姿を通してハリリーは文化の凋落を嘆く。ハリリーの『マカーマート』創作意図は、語法違反を糾す彼の語学書『潜水夫の真珠 Durra al-Ghawwāṣ』のそれと軌を一にした警世の書であり、その対象は教養人、文人達であった⁽⁶²⁾。

このようにして、ハリリーの『マカーマート』は、アダブの、アダブによる、アダブのための作品であることが改めて確認できて、先に示した論点をさらに強化する結論を得た。

(参考文献)

1. 原典資料

Bashshār, ibn Burd, *Dīwān*, 4 vols., ed. M. Ṭ. b. ‘Āshūr, al-Qāhira, 1950.

al-Hamadhānī, Badī‘ al-Zamān, *al-Maqāmāt*, ed. Muḥammad Muḥyī al-Dīn ‘Abd al-Ḥamīd, *Sharḥ Maqāmāt Badī‘ al-Zamān al-Hamadhānī*, Bayrūt, Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya, n.d.

al-Ḥarīrī, *Maqāmāt*, ed. Al-Sharīshī, *Sharḥ Maqāmāt al-Ḥarīrī*, 5 vols., Bayrūt, al-Maktaba al-Thaqāfiyya, n. d.; Antoine Issac Silvestre de Sacy, *Les Séances de Hariri publiées en arabe avec un commentaire choisi*, deuxième édition par Joseph Reinaud et Joseph Derenbourg, Paris, 1847~1853 [repr. Amsterdam, Oriental Press, 1968]; ed. Sābā, Isā, *Maqāmāt al-Ḥarīrī*, Bayrūt, Dār Ṣādir, 1980; ed. al-Ṭībī, Aḥmad ‘Abd al-Salām, *Maqāmāt al-Ḥarīrī al-Musammā bi-al-Maqāmāt al-Adabiyya*, 6th ed., Bayrūt, Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya, 2008.

Ibn Bakhtīshū‘, *Risāla fī al-Ṭibb wa-al-Aḥdāth al-Nafsāniyya*, herausgegeben und übersetzt von Felix Klein-Franke,

- Über die Heilung der Krankheiten der Seele und des Körpers, Beirut, Dar el-Machreq, 1977.
- Ibn Buṭlān, *Da'wa al-aṭibbā'*, ed. Felix Klein-Franke, Stuttgart, Hippokrates Verlag, 1984.
- _____, *Taqwīm al-ṣiḥḥa*, ed. & trans., Hosam Elkhadem, *Le Taqwīm al-ṣiḥḥa(Tacuīni Sanitatis) d'Ibn Buṭlān: un traité médical du XIe siècle: Histoire du Texte, Édition Critique, Traduction, Commentaire*, Lovanii, Aedibus Peeters, 1990.
- Ibn Khallikān, *Wafayāt al-A'yān*, 8 vols., Bayrūt, Dār Ṣādir, n.d.
- Ibn Riḍwān, *Kitāb Daf Maḍārr al-Abdān fī 'Arḍ Miṣr*, ed. A.D. Gamal, *Medieval Islamic Medicine: Ibn Riḍwān's treatise 'On the Prevention of Bodily Ills in Egypt'*, translated with an intro. by M. W. Dols, Los Angeles, University of California Press, 1984.
- al-Ma'arrī, Abū al-'Alā, *Risāla al-Ṣāhil wa-al-Shāḥij*, ed. 'Ā'isha 'Abd al-Raḥmān, al-Qāhira, 1984.
- Ṣā'd, ibn al-Ḥasan, *Kitāb at-taḥwīq aṭ-ṭibbī*, ed. Otto Spies, *Das Buch At-Taḥwīq aṭ-ṭibbī des Ṣā'id ibn al-Ḥasan: Ein arabisches Adab-Werk über die Bildung des Arztes herausgegeben und bearbeitet*, Bonner Orientalistische Studien, Bonn, Selbstverlag des Orientalischen Seminars der Universität Bonn, 1968.
- al-Suyūtī, *Maqāmāt*, ed. Muḥammad Ibrāhīm Sālim, *Maqāmāt al-Suyūtī al-Adabiyya wa-al-Ṭibbiyya*, al-Qāhira, Maktaba Ibn Sīnā, 1988.
- al-Tanūkhī, *Nishwār al-Muḥāḍara*, ed. 'Abbūd al-Shālji, Bayrūt, 1971-3.
- _____, *al-Faraj ba'da al-Shidda*, 4 vols., Bayrūt, Dār Ṣādir, 1978.

2. 研究資料

- Allen, Roger, *The Arabic Literary Heritage: The Development of its Genres and Criticism*, Cambridge, Cambridge University Press, 1998.
- Álvarez-Millán, C., "Practice versus Theory : Tenth-century Case Histories from the Islamic Middle East," *Social History of Medicine*, 13(2000).
- Arano, L. Cogliati, *The Medieval Health Handbook: Tacuinum Sanitatis*, New York, George Braziller, 1976.
- Ashtiany, Julia, "al-Tanūkhī's *al-Faraj ba'd al-shidda* as a Literary Source," in Alan Jones(ed.), *Arabic Felix: Luminous Britannicus*, Reading, Ithaca Press, 1991.
- Bachmann, Peter, "Arzt und Krankheit in einigen Gedichten des arabischen Lyrikers al-Mutanabbī," *Medizinhistorisches Journal*, 4(1969).
- Beaumont, Daniel, "A Mighty and Never Ending Affair: Comic Anecdote and Story in Medieval Arabic Literature," *JAL.*, 24(1993).
- _____, "The Trickster and Rhetoric in the *Maqāmāt*," *Edebiyāt*, 5(1994).
- Beeston, A. F. L., "The Genesis of the *Maqāmāt* Genre," *JAL*, 2(1971).
- Behrens-Abouseif, Doris, "The Image of the Physician in Arab Biographies of the post-classical Age," *Der Islam*, 66(1990).
- Bonebakker, S. A., "Early Arabic Literature and the Term *Adab*," *JSAI.*, 5(1984).
- _____, "Adab and the concept of *belles-lettres*," in *CHAL.*: 'Abbasid Belles-Lettres, 1990.
- Bray, Julia, "The Physical World and the Writer's Eye: Al-Tanūkhī and Medicine," in J. Bray(ed.), *Writing and Representation in Medieval Islam: Muslim Horizons*, London and New York, Routledge, 2006.
- Browne, E. G., *Arabian Medicine: The Fitz Patrick Lectures delivered at the College of Physicians in November 1919 and November 1920*, Cambridge, Cambridge University Press, 1921.

- Bürgel, J. Ch., “Die Aufentdeckung vom Scheintod: Ein Topos der Medizinischen Literatur des arabischen Mittelalters,” *Der Islam*, 55(1965).
- _____, “*Adab* und *i’tidāl* in ar-Ruhāwī’s *Adab aṭ-Ṭabīb*“, *ZDMG*, 117(1967).
- _____, “Secular and Religious Features of Medieval Arabic Medicine”, in Ch. Leslie(ed.), *Asian Medical Systems: A Comparative Study*, Berkley, 1976.
- Chenery, T. and Steingass, P. (trans.), *The Assemblies of al-Hariri*, 2 vols., London, Oriental Translation Fund, 1867, 1898.
- Conrad, Lawrence, I., “Scholarship and Social Context: A Medical Case from the Eleventh-century Near East,” in Don Bates(ed.) *Knowledge and the Scholarly Medical Traditions*, Cambridge, Cambridge University Press, 1995.
- Dayf, Shawqī, *Al-Maqāma, Funūn al-adab al-‘arabī: al-Fann al-qiṣaṣī*, al-Qāhira, Dār al-Ma’ārif, 1954.
- Dols, Michael, W., *Majnūn: The Madman in Medieval Islamic Society*, ed. Diana E. Immisch, Oxford, Clarendon Press, 1992.
- Elgood, Cyril, “*Tibb-ul-Nabbi* or Medicine of the Prophet: Being a translation of two works of the same name, I . – The *Ṭibb-ul-Nabbi* of al-Suyūfī. II . – The *Ṭibb-ul-Nabbi* of Maḥmūd bin Mohamed al-Chaghghayni, together with introduction, notes & a glossary,” *Osiris*, 14(1962).
- Foda, Hachem, “La langue de *adab*,” in F. Sanagustan(ed.), *Paroles, Signes, Mythes : Mélanges offerts à Jamal Eddin Bencheikh*, Damas, Institut Français d’Études Arabes de Damas, 2001.
- Gelder, G. Jan van, *Of Dishes and Discourse: Classical Arabic Literary Representations of Food*, Richmond, Curzon Press, 2000.
- Geries, Ibrahim, “*L’adab* et le genre narratif fictif,” in Stefan Leder(ed.), *Story-telling in the Framework of Non-fictional Arabic Literature*, Wiesbaden, Harrassowitz, 1998.
- Gutas, Dimitri, *Greek Thought, Arabic Culture: The Graeco-Arabic Translation Movement in Baghdad and Early ‘Abbasid Society*(2nd-4th/8th-10th Centuries), London and New York, Routledge, 1998. (山本啓二・訳『ギリシア思想とアラビア文化－初期アッバース朝の翻訳運動』、勁草書房、2002年)。
- Hämeen-Anttila, Jaakko, *Maqama: A History of a Genre*, Wiesbaden, Harrassowitz, 2002.
- Hamori, A., “Folklore in Tanūkhī: The Collector of Ramlah,” *Studia Islamica*, 71(1990).
- _____, “Tinkering with the Text: Two Variously Related Stories in the *Faraj Ba’d al-Shidda*,” in Stefan Leder(ed.), *Story-telling in the Framework of Non-fictional Arabic Literature*, Wiesbaden, Harrassowitz, 1998.
- Isaacs, H. D., “Arabic Medical Literature,” in *CHAL: Religion, Learning, and Science in the ‘Abbasid Period*, 1990.
- Iskandar, Albert, Z., “The Medical Bibliography of al-Rāzī,” in G. F. Hourani(ed.), *Essays on Islamic Philosophy and Science*, Albany, State University of New York Press, 1975.
- _____, “Al-Rāzī,” in *CHAL: Religion, Learning and Science in the ‘Abbasid Period*, 1990.
- Jacquart, Danielle and Micheau, Françoise(eds.), *La Médecine Arabe et L’Occident Médiéval*, Paris, Maisonneuve et Larose, 1996.
- Kilito, Abdelfattah, “Contribution a l’étude de l’écriture «littéraire» classique : L’exemple de Ḥarīrī,” *Arabica*, 25(1978).
- _____, *Les Séances: Récis et codes culturels chez Hamadhānī et Harīrī*, Paris, Sindbad, 1983.
- Klein-Franke, Felix(trans.), *Das Ärztebankett*, Stuttgart, Hippokrates Verlag, 1984.
- Levey, Martin, *Medical Ethics of Medieval Islam with Special Reference to al-Ruhāwī’s ‘Practical Ethics of the Physician’*, Transactions of the American Philosophical Society, N. S., 57(1967), Philadelphia.

- Malti-Douglas, Fedwa, *Structures of Avarice: The Bukhalā' in Medieval Arabic Literature*, Leiden, E. J. Brill, (1985a).
 _____, “Maqāmāt and Adab: ‘Al-Maqāma al-Maḍīriyya’ of al-Hamadhānī,” *Journal of the American Oriental Society*, 105(1985b).
 _____, “Classical Arabic Crime Narrative: Thieves and Thievery in *Adab* Literature,” *JAL*, 19(1988). (1988a).
 _____, “The Classical Arabic Detective,” *Arabica*, 35(1988). (1988b).
 Margoliouth, D. S., *The Table-Talk of a Mesopotamian Judge by Al-Muhassin Ibn ‘Ali al-Tanukhi*, Part II & VII, Hyderabad, “Islamic Culture” Office, 1922.
 Mattock, J. M., “The Early History of the *Maqāma*,” *JAL*., 15(1986).
 Meyerhof, Max, “Thirty-three Clinical Observations by Rhazes(c. 900 AD),” *Isis*, 23(1935).
 Monroe, James T., *The Art of Badī' az-Zamān al-Hamadhānī as Picaresque Narrative*, Beirut, American University of Beirut, 1983.
 Okazaki, Keiji, “*Maqāma* as a Courtroom Play: Disguised Hero, Duped Judge,” *Orient*, The Society for Near Eastern Studies in Japan, 42(2007).
 Omri, Mohamed-Salah, “‘There is a Jāhīz for Every Age’: Narrative Construction and Intertextuality in al-Hamadhānī’s *Maqāmāt*,” *Arabic and Middle Eastern Literature*, 1(1998).
 Perho, Irmeli, *The Prophet’s Medicine: A Creation of the Muslim Traditionalist Scholars*, *Studia Orientalia* (74), Helsinki, The Finnish Oriental Society, 1995.
 Plessner, Martin, “The Natural Sciences and Medicine,” in J. Schacht and C. E. Bosworth(eds.), *The Legacy of Islam*, sec. ed., Oxford, Oxford University Press, 1979.
 Prendergast, W. J., (trans.), *The Maqāmāt of Badī' al-Zamān al-Hamadhānī, with an introd. and notes historical and grammatical*, new imp. London, Curzon Press, 1973.
 Rahman, Fazlur, *Health and Medicine in the Islamic Tradition: Change and Identity*, New York, Crossroad, 1987.
 Richards, D. S. R., “The *Maqāmāt* of al-Hamadhānī : General remarks and a consideration of the manuscripts,” *JAL*., 22(1991).
 Rotter, Gernot (trans. & annot.), *Al-Hamadhānī: Vernunft ist nichts als Narretei, Die Maqāmen*, Bibliothek arabischer klassiker, Lenningen, Edition Erdmann, 2004.
 Sacy, Silvestre de (trans.), “Extrait du Recueil des Séances d’Abou’Ifadhl Ahmed Hamadani, surnommé Bédi-Alzēman,” in his *Chrestomathie Arabe*, tome III , Osnabrück, Biblio Verlag, 1973, (Reimpression de l’édition de 1827).
 Sanagustin, Floréal, “Humanisme et Médecine à l’époque classique,” in F. Sanagustin(ed.), *Paroles, Signes, Mythes : Mélanges offerts à Jamal Eddine Bencheikh*, Damas, Institut Français d’Études Arabes de Damas, 2001.
 Schacht, Joseph and M. Meyerhof, *The Medico-Philosophical Controversy between Ibn Butlan of Baghdad and Ibn Ridwan of Cairo: A Contribution to the History of Greek Learning among the Arabs*, The Egyptian University, The Faculty of Arts, Publication no. 13, Cairo, Egyptian University, 1937.
 Schipperges, Heinrich, *Arabische Medizin im lateinischen Mittelalter: mit 83 Abbildungen*, Berlin, Heidelberg, New York, Springer, 1976.
 _____, *Der Garten der Gesundheit: Medizin im Mittelalter*, München and Zürich, Artemis, 1985. (大橋・濱中・波多野・山岸訳『中世の医学 治療と養生の文化史』、人文書院、1988年)。
 Sezgin, Fuat, *Geschichte des arabischen Schrifttums, Band 3 – Medizin, Pharmazie, Zoologie, Tierheilkunde bis ca. 430 h.*, Leiden, Brill, 1970.

- al-Shak'a, Muṣṭafā, *Badī' al-Zamān al-Hamadhānī, Rā'id al-qīṣṣa al-'arabiyya wa-al-maqāla al-ṣuḥfiyya*, al-Qāhira, 'Ālam al-Kutub, 1959.
- Somogyi, Joseph, "Medicine in Ad-Damiri's *Hayat al-Hayawan*," *JSS*, 2(1966).
- Sperl, Stefan, "Man's 'Hollow Core': Ethics and Aesthetics in *Ḥadīth* Literature and Classical Arabic *Adab*," *BSOAS*, 70(2007).
- Tillier, Mathieu, "L'Exemplarité chez al-Tanūhī: Les Cadis dans le *Niṣwār al-Muḥāḍara*," *Arabica*, 45(2007).
- Toorawa, Shawkat, M., "Defining *Adab* by (Re)defining the *Adīb*: Ibn Abī Ṭāhir and storytelling," in Ph. Kennedy(ed.), *On Fiction and Adab in Medieval Arabic Literature*, Wiesbaden, Harrassowitz, 2005.
- Turner, Howard, R., *Science in Medieval Islam: An Illustrated Introduction*, Austin, The University of Texas Press, 1997. (久保儀明・訳『図説 科学で読むイスラム文化』、青土社、2001年)。
- Ullmann, Manfred, *Die Medizin im Islam, Handbuch der Orientalischichte des arabischen Schrifttums* I, 4, 1, Leiden, 1970.
- _____, *Islamic Medicine*, Islamic Surveys 11, Edinburgh, The Edinburgh University Press, 1978.
- Walzer, R., "Aristotle, Galen, and Palladius on Love," in his *Greek into Arabic: Essays on Islamic Philosophy*(Oriental Studies vol. 1), Oxford, Bruno Cassier 1962.
- Wenzel-Teuber, Wendelin, *Die Maqamen des Hamadhani als Spiegel der islamischen Gesellschaft des 4. Jahrhunderts der Hidschra*, Würzburg, Ergon, 1994.
- Young, Douglas, C., *Rogues and Genres: Generic Transformation in the Spanish Picaresque and Arabic Maqāma*, Newark, Juan de la Cuesta, 2004.
- Zakharia, Katia, *Abū Zayd al-Sarūgī, Imposteur et Mystique: Relire les Maqāmāt d'al-Ḥarīrī*, Damas, Institut Français d'Études Arabes de Damas, 2000.
- 五十嵐一『イブン・スィーナール 医学典範』、科学の名著8、朝日出版、1981年。
同『東方の医と知 イブン・スィーナール研究』、講談社、1988年。
- 岡崎桂二『『マカーマート』の言語遊戯－「マディーラのマカーマ」に即して』『関西アラブ・イスラム研究』、1号(2001年)。
同「アダブの畀－『マカーマート』のエクリチュール」『四天王寺国際仏教大学紀要』人文社会学部、34号(2002年)。
同「ジャンルの生成と変容－「間テキスト性」から見たる『マカーマート』」『四天王寺国際仏教大学紀要』、人文社会学部、40号(2005年)。
- カイカーウース・ニザーミー(黒柳恒男訳)『ベルシア逸話集 カープースの書 四つの講話』、東洋文庫134、平凡社、1999年。
- ガレノス(内山勝利、木原志乃訳)『ヒポクラテスとプラトンの学説』、I、II、西洋古典叢書13、14、京都大学学術出版会、2005年。
- ガレノス(種山恭子訳、内山勝利編)『自然の機能について』、西洋古典叢書15、京都大学学術出版会、2005年。
- 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』上、岩波書店、1977年。
- 菊池忠純「マムルーク朝時代のカイロのマンスール病院について－ワクフ設定文書の再検討を通じて」『藤本勝次先生加藤一郎先生古希記念中近東文化史論叢』、同朋社、1992年。
- 志田信男(訳)『アヴィセンナ「医学の歌」』、草風館、1998年。
- ヒポクラテス(小川政恭訳)『古い医術について 他八編』、岩波書店、1963年。

藤本勝次・池田修・梅田輝世（訳注）『ウサーマ・ブス・ムンキズ回想録』、関西大学東西学術研究所 訳注シリーズ3、関西大学出版部、1987年。

ブハーリー（牧野信也訳）『ハディース イスラーム伝承集成』、6巻、中央公論社、2001年。

前嶋信次『アラビアの医術』、中央公論社、1965年。

同「テリアカ考—文化交流史上から見た—薬品の伝播について」『東西文化交流の諸相 東西物産の交流』、誠文堂新光社、1982年。

注 記

- (1) Richardsは「マジュリス majlis」との対比の上で「マカーマ maqāma、複数形 maqāmāt」の語義の変遷をたどり、原義の「立つ所」から「立って話をする人」、「その人の話」、さらに「その人の話を聞く場所」へと変化したと結論づけた。Richards. Cf., Beaumont(1994), pp. 4-5; Kilito(1983), pp. 98-99; Hämeen-Anttila, p. 65. ハマザーニーに先行する作品探索はザキ・ムバーラクが先鞭をつけ、彼はフスリー（1022年没）の『アダブの精華 Zahr al-ādāb』中に見出したと主張したが、以後決定的な証明がなされずに現在に至っている。Cf., Beeston; Hämeen-Anttila, pp. 66-98.
- (2) Chenery, vol. 1, pp. 19-20. Zakharia, Kilito 等の、主にフランス語で研究発表する学者や Beaumont らは、マカーマート研究に Tzvetan Todorov, Gérard Genette, Michael Riffaterre 等の最新の文学理論を援用している。また Harold Bloom の提唱する「誤読理論」や「影響の不安説」をマカーマート研究に適用する研究者もいる。岡崎（2005年）、222頁、注61。さらに、Young らは「変革期の文学」という視点に立ち、比較文学的にマカーマート研究を行っている。また Wenzel-Teuber は社会史的観点から「マカーマート」を歴史史料として扱う。
- (3) 岡崎（2002年）、同（2005年）。
- (4) Bray, p. 215 ; Browne, p. 73; Dols(tr.), p. ix. 免疫学者であり、かつ医学史の大著をものした川喜田は、「人の病苦、ヒポクラテスのいう「悩み」にはじまる医学は、それが人の体と深く絡んだできごとを対象とするだけに、たいそう複雑な構造をもっている。……さらにまた、病苦の主体が単に生物としてのヒトではなしに、ほかでもない人であるあるからには、医学は本質的に、あの、人さまざまに異なった理解をもつ人間論の問題—当然そこにはその人間がつくった社会の話が絡み合う—でもなければなるまい。その辺でおのずから医学、ことに医術は自然科学の枠から大きくはみ出す」と指摘する。川喜田、2頁。同様にシッパージェスは、「(医学史)の領域においてはとくに経済史と社会史の現代的研究方法が重要となりうるものであって、これらは技術や農業、集落の様式、栄養や健康状態を、比較的大きな地方やまた時代的に限定された枠内で取扱うのである」と述べる。大橋他訳、7頁～8頁。イスラーム世界における医学と文学を接続する作業をおこなったブラウンの研究は、その時代性（1919年、20年）と講演集という制約にもかかわらず、興味深い話を伝える広範な内容は今でも価値を失わない。Browne. 五十嵐（1988）、288頁。
- (5) イスラーム世界における医療は、イスラーム勃興後、現在に至るまで複合的で、専門医の診断、治療のみならず、預言者の医術（注59参照）の実行、祈祷、聖地参詣、等が並行して行われていた。EI, sv. ṭibb ; Bürgel(1976), p. 44 ; Dols(tr.), p. 39 ; Sanagustin, p. 179. ヒポクラテス、ガレノスを筆頭とするギリシア語文献の翻訳は、アッバース朝初期より、バグダードの「知恵の館」においてフナイン・ブヌ・イスハークらにより精力的に行われてきた。Cf., Jacquart et Micheau, pp. 32-45 ; Ullmann(1978), pp. 7-40; Gutas, 山本訳、36頁～39頁、102頁～107頁、133頁～134頁。それらの翻訳文献に基づきラーズリーの『医学大全 al - Hāwī al-Ṭibb』やイブン・スィーナーの『医学典範 al-Qānūn fī al-Ṭibb』が書

かれてイスラーム医学が体系化された。治療に当たってはヒポクラテス伝来の「4元素4性質説」に基づいて体液の平衡を保つことに最大の配慮が尽くされた。また、ハールーン・アッラシード（在位786年～809年）がバグダードに建設した本格的な病院（bīmārīstān）を嚆矢として、各地に医学院を併設する医療施設が建設され、医学における理論、実践両面での発展を支えた。*EI*, sv. bīmārīstān by D. M. Dunlop. 誤解を招きやすい「イスラーム医学」の呼称は、アラビア医学との対比において用いられているもので、イスラーム世界において、ヒポクラテス、ガレノスの伝統を受け継いで広く実行されていた医療を示す表現であり、「預言者の医術」と混同してはいけない。アラビア医学の呼称は主要な医学文献がアラビア語であったことに基づくが、本稿ではアラビア医学に比して、より広範な領域をカバーするイスラーム医学の表現を用いる。Cf., Browne, p. 2, p. 65 ; Ullmann(1978), p. xi. またイスラーム医学の担い手にはユダヤ人やキリスト教徒も多かったことも見落とせない事実である。Browne, p. 65 ; Dols(tr.), p. vii, fn., 1, p.3. イスラーム医学に関する基本的な概説書は Ullmann(1978) であり、より簡略には Turner の「医学」の項、『イスラムの遺産』所収の Plessner 論文、Dols(tr.) の第1部（1頁～73頁）が挙げられる。医学と文学を繋ぐ概説書としては、Isaacs が挙げられる。前嶋（1965）がしばしば依拠する Browne も今なおその価値を失わない。Sezgin と Ullmann(1970) はイスラーム医学に関する包括的な文献目録であるが、ウルマンはセツギンの内容に疑義を呈している。Ullmann(1978), p. xiii.

- (6) 11世紀末より、中世キリスト教国においては、アラビア語より訳出された諸種のラテン語医学テキストが使用されて続け、ガレノスの影響は近代にまで及んでいる。Dols(tr.), pp. 8-9 ; Isaacs, p. 358. アラビア語訳医学書中、最も権威ある医書がイブン・スィナー、ラテン名、アヴェロエス、の『医学典範』である。Dols(tr.), p. 10 ; Isaacs, p. 358. この書の暗記用韻文訳である「医学の歌」は、イタリアのモンペリエ医学校では、17世紀後半まで医学研究用に常用されていた。志田、240頁。イスラーム医学の影響下にあるヨーロッパ・キリスト教圏の医学教育に関しては、Schipperges(1976), pp. 112-126, 参照。
- (7) 十字軍時代にシリアの領主であるウサーマ・ブヌ・ムンキズ（1095年～1188年）はその『回想録』において、アラブ側の医師との対比において、十字軍側の医者がいかに稚拙で野蛮な治療を行ったかを、生々しく描いている。ウサーマは「フランク人の医術の奇妙さ」と題して、敵軍のアル・ムナイティラの城主がイスラーム軍に医師の派遣を要請してきたので、配下の医師を遣わせた逸話を伝えている。派遣されたキリスト教徒である医師は予想に反して10日足らずで戻ってきた。その理由を、フランク人医師の野蛮な治療を実見し、自己の知見を発揮する余地はないと判断し、早々に帰ってきたと、述べた。藤本他訳、175頁～176頁。Browne, pp. 68-72. 前嶋（1965年）、117頁～119頁。
- (8) リサーラは元来「書簡」を意味し、現代語でもその意味を保持している。同時に、アッバース朝期に、統治の必要上採用された書記官僚（カーティブ）や宮廷を圍繞する文人達は特定のテーマに関して公開を前提とする小論文のものとなり、これらもリサーラと呼ばれていた。書記や文人たちは自己の博識と文章力を誇示するために競ってリサーラに挑むようになった。その代表者がジャーヒズである。Hämeen-Anttila, pp. 87-88 ; Allen, pp. 229-233 ; *EAL.*, sv. risāla.
- (9) アダブはアラブ文化の核をなす概念であり、ジャーヒリーヤ期では主として「礼儀作法」を意味していたが、やがて「学識」の意味が加味されるようになった。そして、礼儀、学識とともに備えた人をアディーブ（文人）と呼ぶようになり、アラブ・イスラーム文化における一つの理想像を形成した。これらの人々が多様なテーマで執筆した作品もまたアダブと呼ばれ、ジャーヒズ、イブン・クタイバ、ムバッラド、等々が著す大部な作品に結実した。Nallino 以来、アダブの概念とその指示内容に関心を持つ研究者は多いが、Bonebakkar(1984), do(1990) と Malti-Douglas(1985a), pp. 7-16, が包括的である。

- 参照、Gelder, pp. 39-48。また Toorawa はアダブ概念の曖昧さを指摘し、どのような作品がアダブに該当しないかを検討すべきであると主張している。アダブとマカーマートの関係は、Kilito(1983), pp. 71-74。また Foda は「著述 kitāba」がアダブ概念中に含まれるのかという斬新な議論を展開する。
- (10) マカーマート・ジャンル確立後、現代に至るまでのハリリーの影響に関しては、岡崎(2002年)、241頁、注 60 参照。Cf, Allen, pp. 274-278 ; Hämeen-Anttila, pp. 357-359.
- (11) 『窮地の後の救済』に関しては、著述の意図、各話の信憑性、という基本的な問題があり、Bray, Tillier, Ashtiany, Hamori(1990), Geris らが独自の視点から論じている。アシュティアニーは採話者としてのタヌーヒーの役割を論じて、『窮地の後の救済』全体に通底する「語りの対称性」を析出し、そこにタヌーヒーの意図的な変更が行われていると説く。アモリは『窮地の後の救済』中の「ラムラのカーディー」を取り上げ、悪事を隠蔽するための結婚、という民話における汎世界的なモチーフを抽出し、民話を首尾一貫したストーリーに纏め上げたタヌーヒーの作者としての役割を論じている。またテリエーは『窮地の後の救済』の先行作であり同工異曲の『座談の糧』に登場する50名のカーディーの出自を精査して、その過半数がタヌーヒーと同時代人であることを突き止め、さらに彼らの語る話の内容を分析し、タヌーヒーの意図的な操作を指摘している。さらにジェリエは『窮地の後の救済』に所載されている同一の事象に関する3つのバージョンを比較して、採話者のタヌーヒーの変更の跡を明らかにした。Nishwār al-muhādara の語義に関しては、Tillier, p. 3, fn. 12。
- (12) ハディースという語は、通常、話や語りを意味する語であるが、ムハンマドの「言行録」の意味でも用いられる。「ムハンマド言行録」は預言者の言行を伝える部分(マトン)と、それらを伝えた伝承者の系譜(イスナード)からなり、両者は伝承の信憑性を計る指標として、ともに厳密に吟味され、伝承者の信用性を吟味する「系譜学 ʿilm al-rijālī」というイスラーム学の一分野を生み出した。アダブ作品もこの「ハディース」の形式にならない、各逸話の冒頭に、その話を伝えた伝承者の系譜を付している。Sperl, pp. 466-467.
- (13) Bray, p. 218. プレイは『窮地の後の救済』の執筆動機に、神の正義(アドゥル)の信仰の下に、宿命論を排し、人間の自由意志を尊重する、タヌーヒーのムウタズィラの思考があると、論じている。同頁。
- (14) al-Tanūkhī, vol. 4, pp. 192-226.
- (15) 「医学の長 imām fī al-ṭibb」の呼称は Tanūkhī, p. 199, fn. また「アラビアのガレノス」とも呼ばれた。Jacquart et Micheau, p.18. ライイ生まれ。医学のみならず哲学、錬金術、等を含む広範囲の分野の著作を残す。医学に関しては、『医学大全 al-Hāwī fī al-ṭibb』が著名であり、Liber Continens という題のラテン語訳書は Rhazes の呼称とともに、広くキリスト教世界で用いられた。ラーズィーが残した大量の医学文献に関しては、Iskandar 参照。臨床のラーズィー、理論のイブン・スィーナーとして、並び称され、ともにイスラーム医学の代表者に擬されている。Dols(tr.), p. 22 ; Jacquart et Micheau, pp. 57-68. また、ラーズィーは合理的科学の一環として錬金術の研究にも熱心で、一説によると、晩年、錬金術の実験により失明したとされる。Browne, p. 46. 彼は錬金術に関する2冊の『秘密の書』(Kitāb al-Asrār, Sīr al-Asrār) をものした。Browne, pp. 44-50.
- (16) 一族はキリスト教徒であり、代々ジュンディーシャープールで医業に携さわっていたが、765年、ジュルディース・ブヌ・ジブリー・ブヌ・プフティーシューウが当地の院長を務めていた時に、アッパース朝カリフ、マンスールの呼び出しを受けてバグダードに赴いて以後、代々カリフの侍医として、また医師団長の役についていた。『窮地の後の救済』に登場するのは、ハールーン・アッラシードの侍医を務めたプフティーシューウ・ブヌ・ジュルディースである。前嶋(1965年)、41頁～49頁。ニザーミー、289頁～290頁。ジュンディーシャープールに関しては以下の文献参照。EI, s.v. Gondeshapur

- by Cl. Huart and Aydin Sayili; Dols(tr.), pp. 5-6, p. 5, fn., 18.
- (17) tuhlub は水草あるいは苔の一種で、「蛙の着物 pashm-i-wazagh」という語義のペルシア語起源の語で、ギリシア医学でも止血剤として利用された。Browne, p. 74, fn. 2. 前嶋(1965年)、92頁。後者の逸話は、ニザーミー、291頁～294頁。Browne, pp. 75-76. 前嶋(1965年)、85頁～98頁。ラーズリーの著書『痘瘡と麻疹の書』の内容紹介が五十嵐(1988)、60頁～62頁でなされている。また蛇毒の薬効に関して、次章で考察するイブン・プトゥラーンにまつわる逸話が残されている。Browne, pp. 72-73. またこの逸話は十字軍時代にシリアを中心に活躍した、武人であり、また文人政治家でもあったウサーマ・ブヌ・ムンキズ(1095年～1188年)の『回想録』にも紹介されている。藤本他、243頁～246頁。この『回想録』には随所で病氣治療に言及されており、その事実を述べるという回想録の性格からして、当時の実際の医療行為を知る事ができる貴重な資料である。81頁～84頁、195頁、240頁～243頁、247頁～249頁。蛇毒等の解毒剤として古代ギリシア以来知られていたテリアカの流通を、東西に渉る比較文明的観点から考察した前嶋論文(1982年)がある。イスラーム世界における病院に関しては、*El, sv. bīmāristān*; Schipperges(1976), pp. 63-68, 参照。菊池はワクフ文書に即して1200年代のカイロにおける病院の実態を詳細に明かしている。
- (18) al-Tanūkhī, vol. 4, pp. 207-209. ヒジャーマとは洋の東西を問わず広く実行されていた悪血除去法で、英語では cupping、漢方では吸角や吸瓢^{すいふくべ}の字を当てている。ハディースでもしばしば記述されており、「預言者の医術」の一環として施されていた。その実際は、牛の角などにアルコール等を入れて熱して、患部に押し当てるものである。前嶋(1965年)、142頁。Perho, p. 11, p. 53, pp. 105-106. 注(41)参照。ウマイヤ朝からアッバース朝にかけて活躍した詩人、バツシャールに、「彼らは明日には割られる吸瓢師(hajjām)のガラス壺(qawārīru)のよう」との誹謗詩がある。Dīrwān, vol. 3, p. 204. 文学と医学に跨る研究にムタナッビーを論じた Bachmann 論文がある。
- (19) Bray, p. 220; Bürgel(1976), p. 48.
- (20) Álvarez-Millán はラーズリーの「症例集」の詳細な内容分析を行っている。Browne と Meyerhof はともに「症例集」から、腎臓潰瘍を患う患者の診断例を、アラビア語原文と共に翻訳・紹介している。Browne, pp. 51-53; Meyerhof, pp. 332-333, pp. 347-348, Arabic text, pp. 1-2. 前嶋(1965年)、88頁～90頁。
- (21) al-ṭīn al-makhtūm とは捺印粘土のことで、古代ギリシア以来、諸種の病気に薬効があるとされ、イスラーム医学でも重用されていた。特に名高いのがエーゲ海に位置するレムヌス島産のもので、女神アルテミースの印を押された赤土が珍重された。ウルマンはこの粘土の処方を見てもイスラーム医学における「無用な机上の知識」の一例としている。Ullmann(1978), pp. 25-26. 前嶋(1965年)、38頁～40頁に捺印粘土の詳しい説明がある。クンドルは薫陸香と称される乳香の種類を指し、ペルシア語、あるいはギリシア語起源と見なされている。前嶋によると、麒麟竭とはソコトラ島などに産する椰子科の植物の樹脂で、アラビア語で竜血と呼ばれているものを指す。前嶋、前掲書、89頁。
- (22) 医師の倫理や心得に関しては、Ṣā'd ibn al-Ḥasan; Rahman, pp. 91-100; Perho, pp. 48-50; Bürgel(1976), pp. 50-51; Dols(tr.), p. 16.
- (23) al-Tanūkhī, vol. 4, pp. 215-217; Bray, pp. 224-226.
- (24) イスラーム医学は診脈と検尿の二つを診断の最重要のデータとしていた。五十嵐(1988)、190頁。この点において、男女隔離が徹底していたイスラーム世界では、今に至るも女性患者が男性医師の診断を忌避する傾向があり、この時代ではなおのこと男性医が女性の脈を直接取るのは稀であった。前述のラーズリーの「症例集」においても、夫や近親者が女性患者の尿を持参したり、症状を伝えたりして医師の判断を仰ぐ姿が記されている。Meyerhof, p. 340, fn. 43, p. 343, p. 344. またアルヴァ

レスも「症例集」を分析し、その論文中に女性患者の主な症状を列挙している。Álvarez-Millán, pp. 297-298. マイヤーホーフは助産婦のみが女性患者の生殖器官に触れることが許されていたと注記している。Meyerhof, p. 344, fn. 57. このような事情に鑑みると、未婚の娘を男性医に診させる父親の苦悩と屈辱の深さ、そして怒りの激しさ、を読者は十分に感じ取られよう。

- (25) Beeston, p. 9.
- (26) プレイはこの医者態度をガレノスの唱える「有用な嘘」に準えている。Bray, p. 226, p. 243, fn. 39.
- (27) 岡崎 (2005)、218 頁、注 13 参照。
- (28) 藤本他訳注、243 頁～ 246 頁。「イブン・バトゥラーンの奇蹟」と題されている酢の効用に関する逸話はブラウンも取り上げている。Browne, pp. 72-73.
- (29) イブン・ブトゥラーンの創始した「養生表」は簡便な養生法、健康法のガイドブックとして、イスラーム世界のみならずキリスト教世界においても重用され、多くの模倣作品が作成された。Aranono の解説部分。特に、10 頁～ 14 頁参照。イブン・ブトゥラーンの伝記的事実は Klein-Felix(1984), pp. 20-40 ; Ullmann(1970), pp. 129-136。論敵のイブン・リドワーン (998 年～ 1061 年) は、若くして両親と死別し、貧窮のうちに独学で医学を修得した。ファーティマ朝期のカイロの医師団長を務めたが、その狷介な性格で知られていた。Ullmann(1970), pp. 158-160; Dols(tr.), pp. 54-66. 医師としての職を得ようと、隆盛を誇るカイロに来たイブン・ブトゥラーンは偶然にもイブン・リドワーンとの論争に巻き込まれる。論争は表面上、アリストテレス以来の難問である、「雛と他の幼鳥の体温の高低」という問題をめぐるので、一見すると医学、哲学論争の観を呈しており、紹介者の Meyerhof もその見解を指示している。しかしコンラッドは論争の背後に社会的要素が隠れていて、学問的論争はその事実を覆い隠すポーズに過ぎないと論じる。独学で医学を修得しガレノスの書物を金科玉条とするイブン・リドワーンと、専門の医学教育を受け、アリストテレスを筆頭に多方面の知識を身に付けたイブン・ブトゥラーンとの出自と信条の相違が論争の底流にあると説く。それゆえ両者は「雛論争」に無関係な「顔の美醜」や「知識問題」を次々に提示する。Conrad, p. 87. また中世イスラーム世界における医師の置かれた立場や地位に関しては、Dols(tr.), pp. 24-42 ; Behren-Abouseif.
- (30) Conrad, p. 85. マカーマート・ジャンルとしての『医師達の宴会』の分析は、Hämeen-Anttila, pp. 127-132.
- (31) *Ibid.*, p. 86.
- (32) Ibn Buṭlān, p.11. 「マカーマート」の標題の下に多様な内容の作品が書かれたが、以下の特徴を有する作品のみが、ハリリー作品により成立した「マカーマート・ジャンル」に属するものと見なされている。①架空の主人公と語り手を明示したフィクション、②主人公と語り手が各地を放浪し、そこで展開される事件の目撃談を内容とする、③韻文と散文の混交。それゆえ、一人物の説教談であるスューティーの『マカーマート』は、その標題にも拘らずこのジャンルには該当しない。Hämeen-Anttila, p. 34, pp. 55-61.
- (33) マッヤーファーリキーンはチグリス北方25マイル、ディヤールバクルから45マイルに位置し、古代より交通の要衝として盛えた。サーサーン朝とビザンツの支配を受け、イスラーム勢力による征服後も、ハムダーン朝、プーヤ朝、マルワーン朝と様々な政権の支配を受けた。イスラーム支配化においても、東方キリスト教の中心地として多くのキリスト教徒が居住していた。Cf., *EL.*, sv. *Mayyafāriqīn*(V. Minorsky and C. Hillenbrand). 『心身の健康について』を著したイブン・バフティシューウはこの地で活躍し、バグダードに居住するイブン・ブトゥラーンと親交を結んでいたといわれている。Klein-Franke(ed.), p. 17.

- (34) Monroe, p. 123, fn. 39. p. 126 ; Malti-Douglas(1985b), pp. 251-257.
- (35) マディーラは牛肉の煮込み料理であり、天下の名品として珍重されているが、ハマザーニーは、主人公イスカンダリーがバグダドの商人から食事に招待されるが、手拭きからトイレにいたるまでの主人の物自慢によってお預けを食う、抱腹絶倒の物語に仕上げている。近年、この「マディーラのマカーマ」を対象とした研究が数多くなされている。Gelder, pp. 48-53 ; Hämeen-Anttila, pp. 106-109 ; Monroe, pp. 145-153 ; Beaumont(1993) ; Malti-Douglas(1985b). 岡崎(2002年)は演劇学、言語学の双方からこの「マカーマ」を分析したもの。マディーラは先述の『窮地の後の救済』中のラーズイーの逸話にも登場していた。注 17 参照。
- (36) Bray, pp. 237-238. アラブ古典文学を対象とする探偵小説論は Malti-Douglas の 2 研究 (1988a、1988b) 参照。
- (37) Ibn Buṭlān, pp. 16-20, pp. 62-69.
- (38) 『医師たちの宴会』はトゥハイリーのトポスにしたがって、吝嗇家と押しかけ食客の攻防を描くものであるが、主人公が医者の知識を総動員して客に食させないプロットが斬新である。またイスラーム医学における理想的な医師として、ギリシア医学の伝統を引く「哲人医師」像があり、『医師たちの宴会』における博引傍証の医師の言動に遺憾なく発揮されている。訳文にあるように、彼はガレノスは当然のこととして、その他プラトンからイエスに至るまでの幅広い教養を身につけており、その博識と吝嗇家としての行動との乖離が一層笑いを誘う。Klein-Franke による訳注, pp. 230-231, 参照。訳文中のピタゴラスは数学者ではなく、医師の方を指す。Ullmann(1970), p. 82. イスラーム医学における養生法の基本は食餌療法であり、暴飲暴食を諫め、中庸を保つところにあり、その観点からすれば、主人公の医師の言動は首肯できる。イスラーム医学における養生法は、『医師たちの宴会』の作者であるイブン・ブトゥラーンの『養生表』を生み出し、この作品はラテン語に訳されてヨーロッパ・キリスト教世界にも影響を及ぼしている。Cf., Arano. またイブン・ブトゥラーンの論敵であるイブン・リドワーンは、エジプトという風土に適した養生法を説いた作品を残している。Cf., Ibn Riḍwān. 養生法に関しては、Klein-Franke(ed.) ; Ullmann(1970), pp. 190-203 ; Ullmann(1978), pp. 97-103.
- (39) Hämeen-Anttila, pp. 39-41, pp. 53-55. 参照、岡崎 (2005 年)。
- (40) マアッリーヤイブン・シュハイドによるフィクショナルな散文作品に比して、テーマ、語りの形式、構成の各面において『医師たちの宴会』は前記作品を凌駕している。Cf., Hämeen-Anttila, pp. 90-95. Allen を筆頭に、近年のマカーマート研究者の多くは、Bloom の唱える「後続者の先行者に対する影響の不安」説を自説に援用している。Allen, p. 149. 参照、岡崎 (2005)、210 頁～211 頁、221 頁、注 58。
- (41) 第 24 話「マーリスターのマカーマ」は精神病院を舞台にし、入院患者に扮したイスカンダリーがムウタジラ派の傾向を帯びた大演説を行う。Monroe, pp. 80-82. また第 33 話「フルワーンのマカーマ」は、メッカ巡礼後の道中で、イーサーが床屋に立ち寄り災難に遭う話で、吸瓢師 (hajjām) の語が使われている。注(18)参照。Hamadhānī, p. 232, fn. 4. 瀉血師と床屋の関係は EI, sv. ṭibb, 参照。また第 49 話「葡萄酒のマカーマ」中にテリアカ (tiryāq) の語が使われている。Hamadhānī, p. 431, fn. 5.
- (42) al-Hamadhānī, pp. 113-120; De Sacy, pp. 247-251; Prendergast, pp. 85-88. 「モースルのマカーマ」の分析はハメーン・アンティラとモンローが行っている。Hämeen-Anttila, pp. 115-117; Monroe, pp. 135-137. イーサーの「策を弄す ayna naḥnu fī al-ḥīla」の言が図らずも示しているように、しばしば、イーサーは語り手の立場を離れてイスカンダリーの共犯者の役割を演じることがあり、また単独で犯行に及ぶこともある。この点で、主人公、アブー・ザイドと語り手、ハーリスの関係が首尾一貫してストーリー

が展開するハリリー作品との顕著な相違をなしている。岡崎（2002年）は語り手の位置、主人公の役割、同名のマカーマの内容、の3方向からハマザーニー作品とハリリー作品の異同を論じたもの。Cf., Monroe, p. 135.

- (43) Monroe, p.135 ; Hämeen-Anttila, p.115. イスラームにおいて、埋葬はスンナに基づいてできるだけ迅速に行うことが求められており、湯濯後、遺体に死装束を着せた後、一昼夜の内に埋葬すべきであると考えられている。Monroe, p. 135. ハディースには葬礼に関して多数の伝承が残されている。参照、牧野訳、「葬礼の書」、11頁～66頁。
- (44) 編者の‘Abduh は原文の ist (尻) を注記無しで ibṭ (腋の下) に書き換えている。Cf., Hämeen-Anttila, p. 116, fn. 54; Monroe, p. 136, fn. 6; Bürgel(1965), p. 191, fn. 40; Wenzel-Teuber, p. 79, fn. 395, 396. この箇所以外にも、‘Abduh は反倫理的とみなした部分を削除している。例えば、第30話「ルサーファのマカーマ」で犯罪集団が交々盗みの手口を語る場面で、「良俗 (al-‘ādāb) に照らして相応しくからず」として一部分削除されている。Al-Hamadhānī, p. 223; Prendergast, p.128.
- (45) Bürgel(1965), p. 192 ; Monroe, p. 136. なお興味深いことに、この「モースルのマカーマ」はハマザーニーの二つの実体験に基づいているという説がある。若年時、遊学中に追い剥ぎに会い、全財産を奪われた事件と、昏倒し、死亡したものと判断されて埋葬されたが、息を吹き返した事件である。Ibn Khallikān, sv. Badī‘ al-Zamān al-Hamadhānī ; Prendergast, p. 88, fn. 1. またこのような「蘇生術のトポス」は前述の『窮地の後の救済』やニザーミー『4つの講話』においても取り上げられている。そこでは、後に「預言者の医術」に吸収されていく遊牧民の知恵として、鬱血を取り除くために頭や足裏を強打して脳溢血を起こした患者を救済する話が描かれている。Tanūkhī, vol. 4, pp. 208-209. ニザーミー、第6話、第8話。Cf., Bürgel(1965), p. 178, fn. 7, p. 184, ff.
- (46) ‘Abd al-Ḥamīd による注釈。Hamadhānī, p. 115, fn. 4, fn. 5.
- (47) 『コーラン』「雌牛の章」で述べられている「黄色の子牛」の話は、『旧約聖書』の「出エジプト記」の記述を踏襲しており、ここでは迷信の頑迷さとモーセの行う蘇生がテーマとなっている。『旧約聖書』の核をなす「出エジプト記」において、そのハイライトとも言うべき十戒の授与に関わる事件。Hämeen-Anttila, p. 115, fn. 51. 独訳者のロターはその内容から「モースルのマカーマ」を「愚者のマカーマ Der Menschen Torheit」と題している。第46話「黄色のマカーマ」でも黄色の乙女 (jāriya ṣafrā’) という表現が使われている。
- (48) 蘇生術のトポスに関しては、Bürgel(1965) 参照。
- (49) Hamadhānī, p. 120 ; Prendergast, p. 88. Cf., Monroe, p. 137, p. 144.
- (50) 岡崎（2005年）。
- (51) キリトは中世イスラーム世界では、哲学、神秘主義、政治、文化、等の多様な面で、理想像としての「完全人間」が描かれていたと説く。Kilito(1978), p. 36, fn.1.
- (52) 第12話「ダマスカスのマカーマ」、第32話「タイバのマカーマ」、第34話「サビードのマカーマ」。
- (53) 「オマーンのマカーマ」。テキストは以下による。al-Ḥarīrī, ed. al-Sharīshī, vol. 4, pp. 289-319; Sābā, pp. 336-344; De Sacy, vol. 2, pp. 494-510. 英訳は、Steingass, vol. 2, pp. 93-101. Cf. Zakharia, p.350.
- (54) al-Ḥarīrī, ed. al-Sharīshī, vol. 5, p. 284; I, Sābā, p. 423.
- (55) ハロルド・ブルームの提唱する「後続者の先行者に対する影響の不安説」とマカーマ研究の関係については、注40参照。
- (56) li-kulli maqām maqāl. オムリはハマザーニーの第15話「ジャーヒズのマカーマ」を対象にして、アラブ文学における修辭 (balāgha) の分析を行っているが、この研究の核をなすのがこの格言である。

- Omri, p. 31, p. 40.
- (57) zabad bahrī をシュネリーは meerschaum (海胞石) と訳しているが、サーバーは「海面上にある純白で微細な石 (hajar) で、陣痛時の産婦に懸けさせると安産になるとの言い伝えがある」と注している。Chenery, p. 99 ; al-Ḥarīrī, ed. Sābā, p. 341, fn. 4.
- (58) al-Ḥarīrī, ed. Sharīfī, vol. 4, pp. 306-307; Sābā, p. 341-342.
- (59) プハーリー、第5巻、226頁。預言者の医術 (ṭibb al-nabīy, al-ṭibb al-nabawī) とは、預言者、ムハンマドの言行にならって病気の処置を施そうとする行為である。その初期においては、ハディース中の病気や医術に関する事項を一括して纏め上げることであったが、その文章量はそれほど多いものではなかった。例えばプハーリーの『正伝』では、治療 (kitāb al-ṭibb) の項に 58 件、病人 (kitāb al-marḍā) の項に 2 2 件の伝承が集成されているが、これは伝承全体の 2.3% に過ぎないという意見もある。Bürgel(1976), p. 54 ; Perho, p. 53. やがてギリシア伝来の翻訳文献に基づく医学にならっての体系化が行われ、9 世紀にアンダルシアのアル＝クルトゥビーによって書かれた書を嚆矢に、「預言者の医術」と題された書物が陸續とものされ、14 世紀にザハビー (1274 年～ 1348 年) イブン・カイム・アル＝ジャウジーヤ (1292 年～ 1350 年)、イブン・ムフリフ (1362 年没) らの著作に結実し、これらは預言者の医術の理論上の頂点をなすとなされている。Perho, p. 11, p. 67. 預言者の医術の基本精神は、「神から下された病いに、癒しなきもの無し」という先述のハディースに基づくもので、神への全幅の信頼 (tawakkul) の下に、コーラン読誦や祈願を初め、瀉血、焼灼、蜂蜜投与、等の処置を行った。この「オマーンのマカーマ」で描かれているコーランの章句を書いた護符を着用したり、コーランの文句を書いた紙の濯ぎ水の飲用も預言者の医術の一環として実行されていた。Perho, pp. 65-69, p. 113. 預言者の医術に関する文献は、Elgood ; Perho, pp. 149-154 ; Ullmann(1970), pp. 185-189 ; Rahman, pp. 32-38, pp. 41-54.
- (60) ヒポクラテスはその論文「人間の自然性について」において、「さて、人間の身体はその中に血液、粘液、黄および黒の胆汁をもっている。これらが人間の身体の自然性であり、これらによって病苦を病みもし、健康を得もする。いちばん健康を得るのは、これら相互の混合の割合と性能と量が調和を得、混合が十分であるばあいである。病苦を病むのは、これらのどれかが過小か過多であったり、身体内で遊離して全体と混合していなかったりする場合である」と病因を 4 体液の不均衡にあると述べている。さらに同論文第 7 章で「熱・寒・乾・湿」という概念を用いて季節ごとの病気の変化を説明している。(小川訳、102 頁、105 頁～ 107 頁)。ヒポクラテスやガレノスは、この 4 体液と 4 性質とのバランス保持を医療の中心においていたが、イブン・スィーナを筆頭とするイスラーム医学もこの考えを踏襲していた。Ullmann(1978), pp. 56-62 ; Perho, pp. 44-46 ; Meyerhof, pp. 10-13 ; Schipperges(1976), pp. 26-38. 志田、230 頁～ 238 頁。五十嵐(1988 年)、152 頁～ 164 頁。これに反し、「すべての原因は神にあり」と考える宗教勢力は、身体のみならず精神の健全さを保つことを宗教的義務ととらえていた。Bürgel(1967), pp. 98-100 ; Bürgel(1976), pp. 55-57 ; Rahman, pp. 43-49. また、ヒポクラテスやガレノスの伝統を引いて、哲人医師を理想像としていたラーズィーヤやイブン・スィーナらは、保守的なウラマーから絶えず疑いの目で見られており、そのギリシア哲学に基づく思考を批判されていた。ここに預言者の医術が根強く支持され、広く一般に実行されていた理由がある。また同時に、病気は聖なるもので、信仰の堅さを試すために、神から下された試練であり、その苦しみの除去は神の意思に反するというスィーナーたちからの批難もあった。Perho, p. 52, pp. 80-81 ; Dols(tr.), p. 40 ; Bürgel(1976), p. 55 ; Rahman, pp. 37-40. また 13 世紀以降、戦災と疫病という医師の力を超えた現象の多発によって、ギリシア流のイスラーム医学を実践する医師たちの権威が衰えたと説く研究者もい

る。Behrens-Abouseif, pp. 342-343.

- (61) Sharīshī, vol. 4, p. 307 ; Sacy, 504 ; Sābā, p. 341, fn. 4. タヌーヒーの『座談の糧』が伝えるごとく、流産防止を含む諸種の病い対策に、コーランの章句を書き付けた護符を身に付ける習慣はイスラーム世界に広く実施されていた。Cf. Bray, p. 230. アブー・ザイドの行為はこの慣習を利用し、流麗な詩を即興で書き上げる離れ業を行うのがこのマカーマの眼目である。その他の安産祈願に関しては、Ullmann(1978), p. 109, 参照。
- (62) Hämeen-Anttila, pp. 148-153.